

「国立公文書館が大阪大学にやってきた」を開催して

大阪大学アーカイブズ准教授

菅 真城 かん・まさき

はじめに

本稿で紹介する国立公文書館所蔵資料展「国立公文書館が大阪大学にやってきた」（以下、「本展示会」）は、平成25(2013)年2月22日（金）から3月9日（土）まで、大阪大学総合学術博物館待兼山修学館で開催された。主催は国立公文書館、大阪大学アーカイブズと大阪大学総合学術博物館との共催で、大阪大学21世紀懐徳堂の協力を得た。平成24年12月8日から23日に京都府立総合資料館で開催された「公文書の世界in京都」（以下、「京都展」、福島幸宏『公文書の世界in京都』を開催して『アーカイブズ』49、2013年、以下「福島報告」、参照）に続く国立公文書館の館外展示第2弾であった。

「おもしろそう」「よくわからん」「やっぱり無理かも」「人は来るのか」「やってよかった」「ありがとう」等等、本展示会開催に当たって、筆者の心は揺れ続けた。

1. 開催までの経緯

福島報告にあるように、国立公文書館は平成24年度に開館以来初の館外展示を計画し、その会場を公募した。公募書類をインターネットで見た筆者は、「おもしろそう」とまず思った。大阪大学では、平成24年10月1日付けで大阪大学文書館（仮称）を設置すべく準備中であったこともあり、新設されるであろう文書館のお披露目、設立記念行事としても適当であると考えたのであった。文書館設置準備室として応募する意思はすぐに固まったが、問題は会場である。将来文書館が設置されたとしても展示スペースは設けない計画であった

ため、総合学術博物館待兼山修学館の多目的ホールを使用することを考え、博物館に相談した（なお、筆者は総合学術博物館の兼任教員でもある。）。博物館は会場提供には快く応じてくれたが、問題は費用負担等のことであった。公募書類を見て筆者は応募者側の費用負担はほとんど無いと踏んでいたが、総合学術博物館の橋爪節也館長はじめ先生方からは、公募書類に明記されていること以外にも展示会開催に当たっては様々な費用が必要であることをご教示いただいた。また、会場内に現場責任者等を配置するという点についても、異なるキャンパスにいる文書館の職員が待兼山修学館に常駐することは容易ではなく、公募要件をクリアできるか懸念があった¹。筆者の心境は、「よくわからん」「やっぱり無理かも」であったが、阿部武司文書館設置準備室長の判断で、文書館設置準備室として応募することを決定し、関係書類を送付した。

その結果、京都展と同じく5月10日付けで審査結果が通知され、開催が決定した。6月15日には、国立公文書館、文書館設置準備室、総合学術博物館の三者が総合学術博物館待兼山修学館で展示会場の実見と打ち合わせを行った。この場で総合学術博物館長の計らいで展示期間を数日延長し、会期が決定した。また、文書館（仮称）と総合学術博物館が共催となることも決定した。なお、会期が2月下旬から3月上旬となったのは、総合学術博物館が多目的ホールで企画展を開催しない時期に設定したためである。その結果、京都展が先に行われることになり、国立公文書館「初」の館外展示ではなくなったが、大学では初の開催を謳うことになった。その後、国立公文書館が主体となっ

て、主として電子メールを用いて打ち合わせを行っていった。展示内容については、大阪という地域と大学という高等教育機関で開催することを意識した構成にさせていただきたいというこちらの要望を汲み入れていただいた。なお、文書館設置準備室は10月1日付けでアーカイブズに改組し（名称は文書館ではなくアーカイブズとされた）、大阪大学アーカイブズが共催することになった。

広報については、国立公文書館が作成したポスター・チラシを公文書館、博物館、図書館等へ送付した。国立公文書館と大阪大学側の調整に基づいて、大阪大学総合学術博物館が通常チラシ等を送付している機関等や大阪大学アーカイブズが加盟している全国大学史資料協議会会員校にも送付した。また、国立公文書館の手配により阪急電鉄各線の主要駅にポスターを掲示したほか、大阪大学総合学術博物館・広報社学連携オフィス学学連携課から依頼して大阪モノレールの各駅にも掲示していただいた。大阪大学の各部局にもポスター等を送り、学内の周知に努めた。さらに、総合学術博物館の提案で、大阪大学のアウトリーチ活動を担当している大阪大学21世紀懐徳堂に「協力」として参画してもらい、広報活動をサポートしてもらった。このほかの広報は、主にウェブサイトを通じてのものだった。国立公文書館、大阪大学アーカイブズ、大阪大学総合学術博物館及び大阪大学21世紀懐徳堂のそれぞれのウェブサイトに加え、大阪大学ウェブサイト・トップページの「イベント情報」及び「セミナー／シンポジウム情報」コーナーにも展示会情報を掲載した。

2. 展示会の実施

本展示会は、国立公文書館側の提案で、「公文書の世界」の名称は用いず、「国立公文書館が大阪大学にやってきた」とされた。これは、博物館来館者が公文書館に馴染みが薄いと想定されたこと、大阪大学アーカイブズが「国立公文書館等」指定へ向けて準備を進めていることなどに鑑みたものである。「第Ⅰ部 国立公文書館ってどんなところ?」、「第Ⅱ部 あれも、これも公文書」、「第Ⅲ

部 公文書にみる大阪」、「第Ⅳ部 大阪大学の歴史と公文書」の4部構成で、京都展の5部構成とは異なるものとなり、特に本展示会の第Ⅲ部、第Ⅳ部はオリジナルなものになった。第Ⅰ部では新旧憲法（レプリカ）をはじめ、近代日本の歩みをたどることができる代表的な資料を展示するとともに、国立公文書館の活動を紹介するパネル展示を行った。第Ⅱ部では、米軍接収文書など特別な経緯で残された文書と、足尾銅山鉱毒事件に関係する渡良瀬川の砂や献血活動を推進するマスコットキャラクターのぬいぐるみなど、非文字資料等を展示した。第Ⅲ部では室戸台風や大正期の「大阪都」構想など、大阪に関する公文書を展示した。第Ⅳ部では大阪帝国大学の創設や初代総長長岡半太郎関係など、大阪大学に関する公文書を展示した。ここには、大阪大学の公文書（大阪大学アーカイブズは非現用法人文書を所蔵していないため、現用文書）も展示した。この結果、新制大阪大学の設置認可申請書については、文部省に提出したものと大阪大学に控えとして残されたものを同時に観ることができた。この他、壁面には約1,000校の大学・短期大学設置認可申請書（国立公文書館所蔵）の背表紙写真を並べたパネルを作成し、その中から大阪大学と大阪外国語大学の文書を探そうというクイズコーナーも設けた。会場出口には「お気に入りの資料に投票!」のボードを設け、観覧者に気に入った資料にマグネットをはっていただくようにした。展示会場と同じフロアにあるセミナー室では、国立公文書館紹介ビデオと国立公文書館における修復ビデオを上映した。

会場の設営は2月18日（月）から20日（水）にかけて行い、21日（木）には記者向けの内覧会を開催し、22日（金）からいよいよ会期が始まった。この日には国立公文書館の高山正也館長（当時）も来館された。23日（土）には筆者が「大阪大学アーカイブズご紹介」、3月2日（土）には国立公文書館の中島康比古公文書専門官が「国立公文書館ご紹介」というミュージアム・レクチャーを行い、その後展示解説を実施した。これらにはいずれも約30名の参加者を得ることができた。

本展示会は3月9日(土)に無事最終日を迎え、11日(月)・12日(火)に撤収作業を行い、12日夕刻に資料が国立公文書館に到着、13日(水)にすべての開梱を済ませ、本展示会は無事終了した。

14日間の会期中(日曜休館)の観覧者は677名であった。ちなみに、京都展は1,403名。筆者は「人は来るのか」と心配していたが、この数字の差を評価するすべを持たないので、国立公文書館、総合学術博物館としての見解を聞きたいところである。

3. アンケートからみえること

本展示会に来場されたお客様にお願いしたアンケートには、217名の方から回答が寄せられた(回答率約32%)。福島報告で述べられている京都展のアンケートと比較しながら、観覧者の反応を見ておきたい。

年齢は60歳以上が約40%(京都展は43%、以下()内は京都展の数字)と多かったが、30歳以下も23%(20%)を占めた。男女比は男性が66%(63%)であった。居住地は大阪府内が65%と圧倒的で、なかでも、豊中市、箕面市、大阪市、吹田市、池田市といった総合学術博物館が位置している北摂地域を中心とするものであった。これらの結果からは、おおむね京都展と同じ傾向が見いだせる。これまで総合学術博物館に来館されたことのない方が36%もいることは注目される。この中にはたまたま通りかかった方もいるようであるが、本展示会を目的に初めて総合学術博物館に来館された方がかなりいたと考えられる。このことは、総合学術博物館担当者の普段より年配の男性が多いという観覧者についての印象とも符合する。今回の展示で国立公文書館をはじめて知った観覧者は18%にのぼる。普段とは違う観覧者を得たことは、総合学術博物館・国立公文書館両館にとってよかったのではなかろうか。広報媒体としてはポスター・チラシが51%、インターネットが16%と多く、特に駅へのポスター掲示の効果がみられたが、もっと幅広く広報しなければいけないといっ

たアンケートが複数寄せられており、課題も残した。

展示内容についてはおおむね好評で、生の公文書の持つ力を改めて感じる事ができた。地方で開催したこと、大学とコラボしたことを評価し、再度の展示会開催を求める意見もみられた。ただ、展示資料数が少ないという意見が多くみられたのが気がかりである。会場(186㎡)を考えると担当者としては、資料の質と量は適切であったと考えているが、今後この種の展示を実施するにあたっては、このことは考慮する必要があるであろう。

「お気に入りの資料に投票!」では、京都展と同じく終戦の詔書が圧倒的多数であったが、大阪大学の公文書が高得票を得たことは、資料を選定した筆者にとって意外であった。出陳した資料には、現用文書として使用しているパイプ式ファイルのものも含んでいた。日常われわれが使用している公文書にも観覧者に訴える力があつたのである。

また、本展示会開催に当たって、大阪大学アーカイブズとしては、学内の教職員に文書管理やアーカイブズの重要性について理解してもらいたいという希望を持っていたが、アンケートを記入した大阪大学の教職員は20人しかおらず、所期の目的を達成したとは言いがたい。当方の広報能力のなさを反省するばかりである。そのようななかで、3月8日には総務企画部長及び総務課長の呼びかけで総務課職員有志による見学ツアーが開催されたのはありがたかった。ツアー参加者ではないが、大阪大学教職員のアンケートの一文を紹介しておく。「このような展示を通じて教職員が作成する文書が歴史文書として残っていくことを実感してもらって、文書作成に当たっての認識を新たにしてもらえることが今後も重要だと思います。」このアンケートに記されたことが実現できるように、日々努力していきたい。

本展示会を終えて、「やってよかった」が筆者の素直な感想である。国立公文書館、総合学術博物館の方々、そしてなにより来場されたお客様に「ありがとう」と感謝を述べて、擱筆することとする。

¹ 展示会実施時には、国立公文書館職員が1名以上常駐したほか、展示会場である総合学術博物館のスタッフが随時会場の見回りをし、筆者も可能な限り足を運んで、安定的な運営に努めた。